



シ ラ ー

詩 犯罪者 素朴文学と有情文学について 崇高について 世界史とは何か
群盗 たくらみと恋 ドン・カルロス
オルレアンの処女

手塚富雄・関楠生・桜井和市・小宮
曠三・新関良三・実吉捷郎・番匠谷
英一・北通文・野島正城 訳

世界文学大系

18

世界文学大系 18

シ ラ ー



昭和34年11月10日発行

定価 500 円

訳者代表 新 関 良 三

発行者 古 田 晁

印刷者 多 田 基

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291) 局 7651

目次

詩	手塚 富雄 訳	5
犯罪者	関 楠生 訳	21
素朴文学と有情文学について	桜井 和市 訳	35
崇高について	小宮 曠三 訳	85
世界史とは何か、また何のため にこれを学ぶか	新関 良三 訳	94
群 盗	実吉 捷郎 訳	107
たくらみと恋	番匠谷 英一 訳	196
ドン・カルロス	北 通文 訳	263
オルレアンの処女	野島 正城 訳	354
自由の詩人フリードリヒ・シラー	J・R・ベッヒャー 関 楠生 訳	415
解説	新関 良三	429
年譜		444

裝
幀
庫
田
發

シ
ラ
ー

詩

喜びをうたう

喜びよ、きみは美しい火花

天のむすめ、

火のように酔ってわれわれは

きみの神殿にふみのぼる。

神の力できみはふたたび結ぶ

時の波濤のへだてたものを。

人はみな兄弟だ、

きみのやさしい翼のおおうところ。

合唱

さあ 抱きあおう 千万の人よ、

この接吻を全世界に。

兄弟よ——あの星空の上に

ひとりの父は住んでいる。

大きい願いがみたされて

ひとりの友の友となったものは

やさしい女の愛をかちえたものは
いや——この世に生まれて
たった一人の心をでも
自分のものと呼べたものは
列にはいつて歓呼の声をあげろ。
そうでない者はすみへさがって
指をくわえているがいい。

合唱

この大球体を家とするものは

たがいの共感をまもりそだてよ、

星の世界へそれはみちびく

未知の神のいますところへ。

ありとあらゆる存在は

喜びを自然の乳房から飲む、

善人も悪人も

そのバラ色の足あとを追う、

それはわれらに

接吻と葡萄と

水火を辞せぬ友とをさずける、

肉体の快楽は蛆虫にあたえられたもの、

だが喜びの天使は神のまぢかに立っている。

合唱

ひざまずくのだね 君たちは？ 千万の人よ。

世界よ きみは造物主を予感するのだね、

星空の上に彼をもとめよ、

星々の上に彼は住む。

喜びは自然をうごかす

つよいばね、

喜びこそは宇宙の

時計じかけの車をまわす、

喜びは蕾から花をひきだし

もろもろの太陽を大空に燃えたたせる。

喜びは学者の知らぬ星々をも

空間におどらせる。

合唱

もろもろの太陽が

壮麗な青空を飛びめぐっているように

兄弟たちよ たのしく君たちの道をすすめ。

英雄のように喜ばしく勝利をめさせ。

白熱する真理の鏡から

喜びは探求者に微笑をおくる、

徳行のけわしい丘の頂上へ

喜びは忍苦の歩き手をみちびいてゆく、

信仰のかがやかわたる嶺には

喜びの旗がひるがえり

柩のさけめからのぞいても

喜びが天使の合唱のただなかにいるのが見える。

合唱

堪えしのべ 雄々しく、千万の人よ、

よりよい世界のために堪えしのべ。

あの星空の上で

偉大な神はむくいてくれる。

神々はわれわれから報償をもとめはしない、

それを神々に倣うのはたのしいことだ。

憂いの人も貧しい人もかくれているにおよばない、

すすんでたのしいわれわれと一しょにたのしめ、

怨みも復讐も忘れよ、

不倶戴天の敵もゆるそう、

敵を泣かすことも考えるな、

悔恨が彼の骨を噛むことも願うな。

合唱

貸しも借りも水に流そう、

全世界は和解せよ、

兄弟たちよ——星空の上で

神はさばく、われわれはさばかずとも。

喜びは杯からはとばしる、

こがねの葡萄の血となつて。

それを飲めば食人人種にも柔和がやどり

絶望の人にも勇氣が芽ばえる。

兄弟たちよ、なみなみと酌いだその杯が廻ってきたら

君たちの席からおどりあがれ！

その泡を天にむかつて飛びちらせ！

その杯を善い靈にむかつてささげろ！

合唱

星の合唱が褒めたたえているもの、

天使の聖歌があがめているもの、

その善い靈にこの杯をそなえろ、
星空の上に住むあの巨きい存在に。

深い苦悩には不屈の勇氣を、

罪なく泣くものには救いの手を、

かたい誓いは永遠を、

友にも敵にも真実を、

王座の前に立つては男子の誇りを――。

兄弟たちよ、たとい財産と命をかけても

功績にはその名譽を！

欺瞞のやからには没落を。

合唱

聖なる団結の輪をかたくしめろ、

このこがねの酒にかけて誓え、

盟約に忠実であることを。

かたく誓え、あの天上の父にかけて。

ギリシヤの神々

神話の国にうまれた美しい方々よ、

あなたがたがまだあの美しい世界を治めていたころ、

喜びを手引きの紐にして

しあわせの多い諸族をみちびいていたころ、

歡喜をもたらすあなたがたの任務がまだ華やかであったころ、

ああ、それは今とはまるで違った世界だった、別世界だった。

アマトウースのヴェーヌスよ、

あなたの神殿は花輪に埋められていたのだった。

詩のほのかなヴェールが

やさしく真理をつつんでいたそのころ――

世界のすみずみまで生命は脈打ち

無感覺なものにさえ感情がやどつていた。

人びとは愛のこもった胸に抱きしめようと

「自然」に高い品位をあたえた、

澄みきったまなざしは

あらゆるものに神をみた。

今はただ 火の珠が非情の回転を

くりかえす と学者は説くのに

あのころはヘーリオスがしずかな威をたたえて

黄金の馬車をすすめたのだ。

この山々にはオレイアスの群がみち

あの樹にはドリアスが住み

やさしいナイアスたちがかかえているかめからは

銀色の流れが泡立って溢れ出たのだった。

あの月桂樹はそのころ救いを求めて身もたえ

タンタロスの娘は石となって沈黙し

シリントスの歎きはあの葦間から

ピロメーラの悲しみはこの森から ひびいたのだ。

あの小川はベルセポーネのために泣く

デメーテルの涙を受けとり

この丘からはキテーレが

むなしくも美しい友の名を呼んだ。

デウカリオンの一族に

そのころ天上の神々は降り立った。

ピュラーの美しい娘たちを手に入れようと

レートーの息子は羊飼いの杖をついた。

人間と 神々と 英雄たちとのあいだを

アーモルが美しい紐でむすび

死すべき者たちも神々や英雄といっしょに

アマトウースの女神に仕えたのだ。

憂鬱なものの思いや悲しいあきらめは

あなたがたの明るい使命のそとに追放され

すべての心は幸福に波うっていた。

幸福な者はあなたがたの一族だったのだ。

そのころは美より神聖なものではなく

童貞の頬をあからめるカメーネや

優雅の女神が支配するとき

神はどんな喜びをも恥としなかった。

あなたがたの神殿は王宮のようにほえみ

栄冠で飾られたコリンソの祝典に

雄々しい若者たちは技を競ってあなたがたを讃美した、

競いの車は雷帝のようにゴールをめがけて疾駆したのだ。

うつくしくからみ合った心をこめた舞いは

かがやく祭壇をめぐり、

あなたがたの額は 勝利の花輪に

あなたがたの匂う髪は 月桂の冠にかざられた。

歡呼の声とともに緑の杖はふりあげられ

飾りたてた豹の一隊が現われる、

喜びを授ける偉大な酒神の来場だ、

彼を先導してよろめきながらくるのはファウンとサチュロス。

彼のまわりをメナードたちが狂喜して跳ねまわる、

その踊りは彼の酒をたたえるのだ、

そしてそのあるじの神の赤らんだ頬は

みなをたのしい宴にさそうのだ。

あのころは怖い骸骨すがたの

死神が臨終の人を訪れはしなかった。

接吻が最後の生命を唇から吸い取って

守護神がしずかにその人の炬火を消したのだ。

冥府のきびしい審判の秤をさえ

人間の子孫がまもり、

オルフォイスの心をこめた

うったえは復讐の女神たちをもうごかした。

死者の霊もエリュシオンの森で

かつての地上の喜びにもう一度めぐりあった。

誠実な愛は 誠実な夫を

御者は ゆくべき道を見いだした。

リーノスの堅琴はいつもひびき

アドメートスはアルケステスの腕に抱かれ

オレステースはふたたび友を

ピロクテーターはふたたび弓矢を 手に入れたのだ。

不滅を約束する高い榮譽が

徳のために戦う闘士をげまし

偉大な行為をしとげた者は

天上の神々のもとにのぼっていった。

死者たちの返還をねがうものたちに
神々は無言でうなずいた。

波間を越えるパイロットたちに
双子座はオリュンポスから光をおくった。

美しい世界よ、どこに行つたのだ、もう一度帰って来てくれ、
自然の青春時代よ。

ああ おまえの童話めくおもかげは
歌の精たちの国に生きているだけだ。

ひっそりと野原は喪服をつけ
どこにも神性は見あたらない、

ああ あの生命のぬくもりにみちた思想は消えて
ただ影だけが残っている。

花々は散り果てた、
怖い北風にさいなまれて。

たつたひとりの神を富ますために
神々の世界が減びなければならなかったのだ。

悲しんでわたしは星空にさがすが
月の女神よ あなたをもう見つけることはできない。

わたしは森にさけび波にさけぶ、
けれど ああ むなしいこだまが返ってくるだけだ。

自分がどんな喜びを贈ることができるかも知らず
自分の壮麗にうっとりすることもなく

自分をうごかす精神に気づかず
わたしの幸福によって幸福を感じるけはいもなく

自分を創ってくれた神なる工匠をたたえることにも冷淡で
時計の振子のいのちのない運動に似て

奴隸のように重力の法則に仕えている、
神性を失った自然は。

自然はきようは自分の墓穴を掘り
あしたはまたそこから掘り出される。

歳月の糸は永久に同じつむに
巻きついたり ほどけたりしている。

なすこともなく神々は
詩歌の国へ帰って行った、幼い時代をすぎて

自分の翼で空にうかんでいる
世界には無用なものになったのだ。

そうだ、神々は故郷へ帰ってしまったのだ、すべての美、
すべての気高さ、すべての色彩、

すべての生きた響きを引き連れて。
そしてわたしらに残されたのはただ魂の抜けた言葉ばかり。

時代の潮のとりまくなかに
神々は今はただビンドスの頂きに救われている。

歌にうたわれて不滅に生きてゆくべきものは
この世では没落せねばならぬのだ。

あこがれ

ああ ひえびえした霧が垂れこめる
この谷の底から

逃げ出る道があればいいに。
そうしたら どんなに嬉しいだろう。

ああむこうに美しい丘の起伏が見える、
永久に若い 永久にみどりの丘だ。

わたしに翼さえあるなら

あの丘々へ飛んで行けるのに。

美しい音楽が聞える、

天上のやすらぎをつたえる調べだ、

そしてかるやかな風が

やさしい薫りを送ってくれる。

こんじきの果実がかがやいて

小暗い木の間から招いている、

あそこに咲いている花々は、

冬の餌食になりはしない。

あああそこに永遠に降りそそぐ日の光をあびたら

どんなにすばらしい生活が開けるだろう。

あの高い丘々を吹きわたる

風はどんなにさわやかだろう。

だが激流が 間をへだてて

ごうごうと鳴っている。

高まるその波を見れば

わたしの魂はおびえる。

一 そうの小舟がゆれているのが見える、

だが ああ船人はいない。

勇気を出して乗りこむのだ、おそれてはいけない。

帆は風をいっぱいはらんでいる。

信ずるのだ、敢行するのだ、

神々は保証をあたえはしない。

ただ信念だけがおまえを運んでくれるのだ、
奇跡を起してあの美しい不思議の国へ。

人 質

(デーモンとピンチアース)

暴君ディオニュースのもとへ

デーモンは忍びよった、短剣をふところにして。

彼は捕吏たちの手に落ちた。

「この短剣で何を謀った？ 語れ」

暗い目で壮士は答えた。――

「町を暴主から解放することを！」――

「その報いは十字架で受けよ」

「わたしは」と男は言った。「死ぬことは覚悟している、

わが命を乞いはしない。

だが情があるなら

三日間の猶余をあたえてほしい、

妹を嫁がせたいのだ。

友を人質に残しておく、

わたしが帰ってこなければ、彼をくびり殺していいのだ」

王はよこしまなたくらみを胸にもって微笑した、

しばらく思案してから言った、

「三日の猶余をあたえよう。

だが 忘れるな、そちがわしのところに

帰らぬうちに期限がきたら

彼はお前の代りに死なねばならぬ、
だがそのときお前の罰は免じてやる」

ダーモンは急いで発った。

そして三日目の朝の明けぬうちに
早くも妹を夫にめあわせた。

憩うまもなく踵をかえす、
さだめの期限におくれまいと。

と 果てしない豪雨が襲った、
山々は滝をなし

小川も河もみなぎり溢れた。

足を飛ばして川岸までくると
橋はうずまく水に引き裂かれ

とどろく波は

橋げたを打ち砕いた。

途方にくれて彼は岸をあちこちした。
どこを見ても

どんなに声をかぎりに叫んでも
彼を望みの地へ渡そうと

安全な岸を離れる舟はなかった、
渡し守の影も見えぬ、

そして激流は海となる。

彼は岸に身を伏した、泣きながら祈った、
両手をゼウスにさしのべた。

「荒れ狂う流れをとめてください。
時は過ぎます。日の位置は

正午です。あの日が沈み
わたしが町に帰りつかなければ
友は命を棄てなければならぬのです」

だが流れの激怒は加わった、
波は波に碎け

時間は容赦なく奔流する。

このままではいられなかった、勇気をふるって
泡立つ奔湍に身を躍らせ

満身の力をこめて
泳いだ。と 神は彼に情をかけた。

岸についた、ふかく神に感謝して
先をいそいだ。

と俄かに盗賊の一隊が
森の闇から現われて

行く手をさえぎり 命を取るぞとわめきたてる。
棍棒をふるっておびやかし

心急ぐ旅人の道をふさぐ。

「何をする？」と彼は驚きに蒼白となつて叫んだ。
「わしがつもっているのは命だけだ、

だがそれも王にやらねばならぬのだ」
言いさす前の男から棍棒を引ったくった。

「気の毒だが、友のためだ」
したたかに棒をふるって

三人を打ち倒した、他の者たちは逃げ去った。

やがて太陽は灼熱の光をおくった、

あまりの労苦に

疲れ果て 膝を折った。

「ああ あなたは慈悲深く 盗賊の手から
激流から 私を救ってくださった、
それなのに私はここで力つき

あのやさしい友は私のために死なねばならないのですか」

すると 銀の音色をたててほとばしる

水音がまぢかにした。なつかしいそのささやき。

彼はじっと耳をすました。

見よ、岩の間から こんこんと、

湧き出てやまぬいのちの水。

喜んで彼は身をかがめた、

燃える手足をよみがえらした。

日は緑の枝々をもれて

かがやく草のしとねに

巨大な樹木の影を描いている。

彼は二人の旅人が来るのに逢った、

急ぎ足ですれちがうと

二人の話すことばが聞える。

「もうあの男は疎かにかかるころだ」

不安のために宙を飛ぶ、

くるしい予感が彼を駆りたてる。

すると夕映えの光をあびて

遠方にシュラークスの城門がほのめき見える、

そのとき留守を守る忠実な家僕、

ピロストラートスがやって来る、

主人の姿に驚愕の声をあげた。

「引き返してください。もうあの方は救えません。

ではせめてご自身の命を救ってください。

いまあの方はお果てになります。

今か今かと待たれていました、

お帰りになることを信じながら。

強く信ずるそのお気持を

暴君のあざけりも奪い取ることはできませんでした」――

「もう時刻が遅れ、救い手としてわたしが彼のところに

帰ることができないなら

わたしは彼と枕をならべるのだ。

友が友に誓いを破ったと

残忍な暴君に言わせはせぬ、

彼は二人をともに殺して

愛と誠がこの世にあることを知るがいい」

太陽が沈もうとする。彼は城門にとりついた。

もう十字架は立てられて

群集がまわりに溢れて見あげている。

綱にかけられてはや友は引き上げられる、

彼は力のかぎり密集の群を分けた、

「刑吏よ、わしを」と彼は叫んだ。「殺してくれ。

彼が人質となってくれたわたしはここだ」

驚きがまわりの群集をとらえた、

二人は抱き合って

喜びと悲しみに泣いた。

たれひとりそれを見て泣かぬものはなかった。
世にも稀なこの話はすぐに王に報告された。
王は人間らしい感動にかられて
そのまま二人を王座の前に呼び出した。

二人をしばらく王はじっと見つめていた。
それから言った。「見事お前らは
わしの心を負かしたのだ。」

友の信義とはむなしい言葉ではなかった、

わしも仲間に加えてくれ、

わしの願いだ、おんみらの盟約に

わしも新たな一人になりたい」

海にくぐる若者

「誰かおらぬか、騎士でもよい、小姓でもよい、この深淵に
飛び入って底をきわめる者は？」

金の杯をわしは投げこむ、

黒い渦巻はたちまちそれを飲み込むのだ。

この杯をとりもどしてきた者には

それをやろう、それを自分の宝とせよ」

王はそう言って、険しくきびしく

海にかかる断崖の

頂きからその杯を

わき立つ渦潮の中へ投げた。

「誰かおらぬか、もう一度尋ねるぞ、

この深みの中へもぐる勇士は？」

だが、居ならぶ騎士と小姓らは

それを聞いても 言葉なく

荒れ狂う海を見下しているばかり。

杯を取りもどそうとする者はない。

王は三たびたずねた。

「誰も飛びこむ者はいないか」

だが一座は沈黙をつづけている。

その時ひとりの若者が、静かな しっかりした足どりで

ためらう小姓の群から歩み出て

はやくも帯を捨て、マントを投げた、

並みいる騎士も婦人たちも

この勇氣ある若者を驚きの眼で見た。

彼は切り立つ岩の端に立って

深淵を見下した。

渦は水流を呑みこんでは

うなりをあげて吐きもどす。

万雷のひびきを立てて、それは

泡立ちながら暗い胎からほとばしるのだ。

煮え立ち わき立ち ほえてはしぶく、

さながら火と水のたたかうさま、

天に沖する泡立つ柱、

潮はつぎつぎにひしめきよせ

疲れることなく やすむことなく

海が海を生むのかとあやしまれる。

しかし、ついに荒れ狂う力は屈^なぎ、
 白い泡立ちのさなから
 大きな亀裂が黒々と口をあけた。
 地獄へ通じると底知れず
 くだけの波は矢のように
 うずまく漏斗^{ヒョウ}の中へ引き込まれる。

そのときすばやく、激浪の返さぬうちに
 若者は神に身をゆだねた。

驚愕の叫びがあたりに起り

渦は早くも彼をさらっていた。

そして勇敢な泳ぎ手をおおうて 神秘をたたえて
 深淵の口は閉じ、彼の姿はもうなかった。

深淵のおもては静かになって

ただ底から鈍いところきが聞えてくるばかり。

おののきながら人々はいのつた。

「気高い若者よ、無事であれ」

底のところきはいよいよ強い、
 不安な恐ろしい時はつづく。

たとえ王が王冠そのものを投げ入れ

「あれを持ち帰った者には

それを授けて王としよう」と言われても

その異常な褒賞^{ほうしょう}を望むものは誰もいない。

あのとどろく海底がかくしているものは

どんな幸運な人間にも手のとどくはずはない。

舟もこの渦潮のとりことなれば
 たちまち底にのみこまれた。

そしてただ碎けた竜骨や帆柱が

一切をのみこむこの墓からやつと浮かんできただけなのだ。
 そのうちにもとどろきはいよいよ強まって、
 嵐のように迫ってくる。

煮え立ち わき立ち ほえてはしぶく、

さながら火と水のたたかうさま、

天に沖する泡立つ柱、

波はつぎつぎにひしめきよせ

遠い雷のひびきのように

うなりながら暗い胎からほとばしる。

見よ、暗い満潮の胎内から

白鳥のように白いものが浮かんた、

腕とかがやく首筋があらわれる、

そして力をこめて泳ぎ出す、

彼だ、そして高く上げたその左手に

杯をかざして喜ばしげに合図をおくる。

長々と息をはき 深々と息を吸って

天上の光にあいさつする。

こおどりして人々は叫ぶ、

「生きて帰った、彼だ。無事だったぞ、

渦巻く潮の墓場から

勇敢な彼は自分の命を救い出したのだ」

若者は陸に上った、歓声が彼をとりまく。